

色染物質会

会誌 第2号

Index

		会員名簿	
①	会長の挨拶	②③	第2回総会議事録
②	クラス会だより S28年	②⑤	会則
③	クラス会だより S29年	②⑦	クラス会だより S34年
④	クラス会だより S31年	②⑧	クラス会だより S35年
⑤	クラス会だより S33年	②⑨	クラス会だより S38年
⑥	京都の史実 (1)	③⑩	クラス会だより S53年
⑪	インクジェットプリンターの染色	③⑫	惜別 松尾君を偲ぶ
⑮	文様染の系譜 (3)	③⑬	物質工学の現況
⑳	奈良のこと (2)	③⑭	古都近辺の名桜

2012年10月発行

第3回総会を迎えるに当たり

色染物質会の皆様には、益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

平素は当会の運営にご協力を頂きまして篤く御礼申し上げます。

今期は、事務局（総務、会計）松尾秀明氏が急逝され、前期の川畑会長に続き、重鎮があい次いで他界されるという事態に直面し、当会は大きな痛手を蒙りましたが、園田英雄氏（S35年卒）を新役員に迎えて事務局総務を、又現役員の子崎治忠氏（S37年卒）に会計をそれぞれ担当していただくことになり、体制を整えることができました。

今期掲げました「HPの更なる充実」「会誌の定期発行」「KIT同窓会への積極的参加」「会員の増強及び名簿の整備」「親睦会（観光、見学）の実施」「愛称募集」等の計画につきましては、保留（KIT関連）、未着手（愛称募集）を除きまして概ね実施できる見通しです。

旧「色染会」から、残余金の一部を本学へ寄付された残額、百万円弱が当会へ移管され、財務基盤が強化されました。

来期は役員の変更期を迎えます。現役員が半数が75歳以上の高齢者という現状から、若返りの時期かと思いますが、上述の諸計画も緒についたばかりですので、来期は現体制で臨み今計画の継続、充実を柱に会員相互の親睦を図りたいと存じます。皆様方のいっそうのご支援、ご協力をお願いいたします。

追記

第3回総会、懇親会を11月10日（土）に予定していますので、多数ご参加いただきますようお願い申し上げます。

平成24年10月2日

会長 佐藤 忠孝

28会新年宴会（色染昭和28年卒）

平成24年1月26日昼、28会新年宴会は洛中に集いました。参加者は過日亡くなられた太田君のご夫人の参加を頂いて総勢の十名でした。嘗て、この会は先斗町の”いろは”に牛鍋を囲み、余勢を駆って近在のバーに遊ぶ定番が数十年続いたものですが、今は都心を離れて閑静なるアークホテル（四条大宮西）にその巣を移しております。この日、ホテルでの豪華な日本料理に座敷は大いに盛り上がり、酒宴酣には世界を語り、業界を憂う論調が燃え、醒めればまたまた体調や家族論議に仲良く慰めあい、共に学んだ物故者にも思いを馳せ語り合う仲間達です。有志のカラオケ会は半世紀前の歌曲が懐かしく、錆びた声にひと時を楽しみました。云うまでもなく、28会員は学部1期生として入学した面々です。卒業の頃、日本は戦后復調の緒にあり、ガチャマンの余韻もなお残り、天然繊維・化繊は漸く戦前の活気を取り戻し始め、合繊が起動する頃でした。加えて学制改革のため前年には卒業生不在となり、この環境下で社会に迎えられました。各人は大いに活躍し、波乱に満ちた業界に、また社会に大きく貢献しましたが、今や年を経てお互いその労をねぎらいながら余生を楽しんでおります。各人の多幸と健勝、ますますの有意義な余生あることを願って散会しました。以上新年宴会のご紹介をさせて頂きました。



後列左より 萩原、出原、田尻、石橋、植村
前列左より 家久、太田夫人、吉岡、稲井、西川
(級友：29名、うち 物故者：13名、病中不参加：4名、参加者：10名)
(色染 昭28・西川三郎)

色染昭和29年卒同期会

還暦を過ぎた頃から 同期会を今まで20回近く 殆ど毎年 お互いに健康に感謝し 友好を深め 楽しく行ってまいりました。

今までの開催場所は 景勝地を訪ね 其の地の料亭や旅館で1泊か日帰りとしています。例えば1昨年は 三河三谷温泉の裏山に登り 弘法大師像、恋人の丘から三河湾の景色を楽しみ 温泉で1泊、 昨年は高槻の摂津峡で溪谷美を觀賞して日帰り。今年私達 傘寿を迎える記念の年に当たりましたが 毎年の事なので 豪勢にせず 普通に 11月10日午前11時 JR石山駅に集合 料亭の出迎えバスで近江大橋を渡り 途中景色を楽しみ 対岸の地で 懇親 来年再会を誓って 解散しました。 参集者は関東圏から2名 関西圏から7名 計9名でした。

集合写真は料亭の玄関付近です。



後列 左より 北村勇耕、高田 弘、金光範明、寺田昌平、芝山達雄
前列 左より 時岡嘉一郎、梅本 顕、西野倭雄、西村孝一郎

(色染 昭29・時岡嘉一郎)

イロヨン会（色染昭和31年卒）クラス会

10月6日昭和31年卒のクラス会を開催しました。第4回卒業ということで「イロヨン会」と名付けています。現在会員数は24名、当日の出席者は14名でした。



(後列左より)

戸塚計浩 湯川謙吉 小倉昭 安田功 北川全応 小阪能一 松永元禎 米長黎 岡野志郎

(前列左より) 正井敬人 井尻三郎 岸田壮一郎 中山茂 和田弘

在学当時、障壁画の権威として著名な建築科の土居次義教授の講義を受講し、また課外授業として市内の寺院での作品解説を経験したことから、会員よりの提案もあり、今回は長谷川等伯一門の襖絵を所蔵している東山七条の智積院に集合して、しばしの時間、絵画や庭園を寺僧の解説を聞きながら鑑賞および境内を散策しました。

その後祇園八坂神社前の「かにや」にて会食、車椅子で岸田壮一郎君も参加し、賑やかに交歓のひとつときを過ごしました。

(色染 昭31・和田弘)

543会クラス会（色染昭和33年卒）

昭和33年色染科卒業生の同窓会は、1954年入学の「54」と科ナンバー「3」を入れて「543会」と命名されています。関西543会と関東543会とに分かれています。最近では毎年両方で開催されています。

平成20年5月21日には卒業50周年を記念して合同543会を京都岡崎「洛翠」にて開催し、翌22日に松ヶ崎の母校を訪問しました。

直近の関西543会は、平成23年9月7日祇園花郷「乾坤」にて7名が出席して開催、関東543会に出席した平井氏より、阿部弘氏（註）の現況と慰労会の様子が報告され、各自の近況報告と懇談の後、井上氏が関係する京都文化博物館での「新天地を求めた京焼き」展を鑑賞しました。

（註）阿部弘氏は福島県いわき市在住。東日本大震災で被災、経営する染色工場が倒壊し、且つ原発事故からの一時避難を余儀なくされたが、その後元のいわき市で工場を再建復旧した。

平成23年9月の関西543会の写真

向かって左より

後列 佐々木忠夫、平井雅夫、福田雍弘、井上雅雄

前列 田村 勇 、坂田 務、西山忠男



（色染 昭33・西山・井上）

知ってるようで知らない京都の史実 1

* 鉄道が開けるまでの京都⇄大阪の交通事情 *

京都⇄大阪の行き来はどうなっていたかは、知ってるようであまり知られていません。幕末のころ『鞍馬天狗はなにわへ馬でひっととび……』等京都から直接行き来ができたように思えますが、これは在り得ない事でした。京と浪速の間には淀川を挟んで現在では想像もつかない大きな【巨椋池（おぐらいけ）】があり、大坂近くの淀川に橋は架かっていませんでした。京都と大阪の行き来は一日がかりの旅行だったのです。

何故、大坂の近くに橋が架かってなかったのかは、信長：秀吉とその後を次いだ家康の根本的な【思想】の違いを理解しないではおられません。京：大坂：江戸 この3ヶ所には大きな物資の流入と軍勢が一度に渡れる橋は、架けてはならないという背景を家康は後継者達に恐らく厳命していたに違いありません。

大坂は天下の経済を握る【台所】京は【天皇】を頂く危険な地域、この二ヶ所を同時に抑えられれば戦乱を避けられないと考えていたのでしょう。事実【伏見鳥羽の戦い】でそれが証明されました。



室町時代までの巨椋池の図

* 東海道は五十三次でなかった *

大坂と伏見に壮大な城を築いた豊臣秀吉は、伏見と大坂を最短距離で結ぶため、文禄三年（1594）毛利一族に淀川左岸の築堤を命じた。これが文禄堤で、堤上の陸路が京街道で



ある。

丸山応挙筆 伏見船着場 江戸末期（原美術館所蔵）

色染物質会 会誌 NO. 2 (6)

『大坂夏の陣で豊臣家を滅亡させ、天下を掌中におさめた徳川家康は、秀忠を呼んだ。
「よいか秀忠。これからは戦のない豊かな国づくりをせねばならぬ」
「仰せの通りでございます」

「そのため、先年、五街道の整備を命じたが、東海道に京街道を取り込んで、天下の台所たる大坂まで延伸し、新たに、伏見、淀、枚方、守口、の四カ所に宿駅を設けよ」
「父上、さすれば、東海道は五十三次から五十七次になりまするのですか」

家康は、大きくうなずき、厳しく命じた。

「なお、五十三次の大津宿からは追分を南西に向かって山科盆地を通り、五十四次の伏見宿に向かわしめよ。大名が京都に入って朝廷と接触するのは好ましくないからじゃ」



家康時代の巨椋池の概略図

家康の命により、宿場には、諸大名の宿泊所となる本陣、大名の側近を収容する脇本陣と家臣や庶民のための旅籠が設けられ、公用荷物の運搬を担当する宿場役所として、問屋場がおかれた。問屋場には、常に人足百人、馬百頭を用意することが定められ、前の宿場から運ばれてきた荷物を、ここで積み替え、次の宿場まで搬送した。一般の荷物の運送は、馬借という運送業者がこれに当たった。』(京街道より転載

歴史街道推進協議会 真木嘉裕)

淀川の右岸は伏見から橋を渡って（伏見には桂川を渡る橋があった）西国街道と呼ばれ神戸、姫路、岡山等西国に通じる街道として栄えていました。一方大坂に行くにはどうしても伏見から船に乗り、淀まで行かねばならなかったのです。江戸時代の施策は西国の大名達に江戸参勤を義務づけ、往復の費用に莫大な費用を掛けさせることにありました。西国の大名達には大坂を経由せず西国に向かわしめるにもこの地域の改善はご法度だったようです。

家康時代の巨椋池図でわかるように、幕末明治初めまでは伏見は港町だったのです。伏見を船で出ると最初に就くのが【淀】でした。ここから【枚方】【守口】へは陸地で行けましたが、多くの人々は乗船したまま大坂まで行っていたようです。

淀川の船便事情

淀川には古くから船便が発達していました。天下を掌握した秀吉は伏見城を築き、伏見城下を淀川水運の拠点とし、淀の河村与三郎と木村孫次郎に朱印状を与え淀船の支配を認めます。次いで家康は淀の河村与三右衛門と木村宗右衛門に朱印状を授けると同時に航行範囲を大坂、尼崎、木津、伏見まで拡張し運上銀 200 枚を上納させる代わりに、公用船以外は運賃を徴収する権利を与えました。

このように淀川の水運業は統一政権に協力する代わりに特権を得ていたのです。淀船は小回りが効く二十石船が主流でしたが、淀川の改修が進み三十石船が勢力を伸ばして来ます。



江戸中期には淀川を行き来する船は千数百隻もあったそうです。その内の三十石船は、大坂と伏見の間を上りは一日又は一晩，下りは半日又は半夜で行き来していました。



船の全長は十五間、幅二間，船頭は四人で乗客定員は二八名が普通でしたから、船内はたいそう窮屈な状態でトイレ也没有。上りは綱引き人足三人で引っ張られ引き綱は九か所に設けられていました。こんな状況で大坂との行き来をしていたのです。

枚方あたりに差し掛かった頃、物売りの小船がこぎ寄せてきて「めしくらわんかい。酒のまんかい。」と言いながら酒や飯ごんぼ汁をぞんざいな言葉で売りにくるのがこの流域で『くらわんか船』とよばれていたようです。淀を出た船は次に対岸の大山崎に着くのが一般的でした。大山崎は淀川流域の港町として大いに栄えていたのです。西国街道へ行く人や物は伏見から乗船し此处で降りたからでした。

明治元年頃伏見と大坂との淀川筋で、一日 1500 人、800 トンの貨物が輸送されていたと英国領事の本国への報告があります。このような背景から、明治 2 年外国型貨客船の運航が許可され、鉄道が敷設された後も明治三十年代後半までかなりの活況を保持していました。しかし明治 43 年京阪電鉄の開業で幕を閉じることになりました。川底が浅く沢山の乗客を乗せられなかったのが主な原因だと言われています。

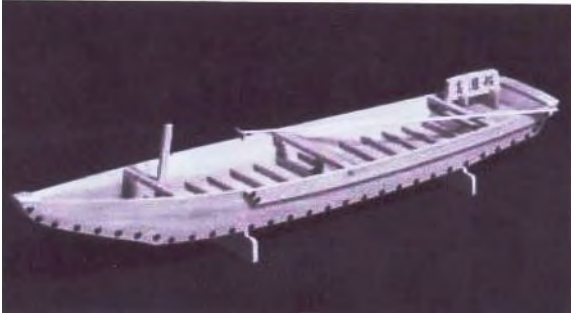
伏見と市内の交通事情 高瀬川の出現 (高瀬川《京都市歴史資料館》より部分引用)

高瀬川は木屋町二条で加茂川から水を引き、南へ流れ伏見に至る人工の川です。浅い川を航行するために作られた底の平たい舟が高瀬舟です。高瀬川は慶長十六年(1611年)に角倉了以が着工し、同十九年に竣工しました。この川の完成で京都・伏見・大坂を舟で結ぶ輸送路ができ、上りでいえば大坂から淀川の荷船(三十石船)で運ばれた物資は、伏見で高瀬舟に積み替えられ京都へ運ばれたのです。

高瀬川には前歴がありました。秀頼が大仏造営の資材を運ぶために鴨川を舟が通れるように掘り下げる工事を角倉了以が行っていたのです。この工事の延長線上に出来てきたのが高瀬川でした。

高瀬川が鴨川とはっきり分離した川になるのは寛文年間(1661~73)のようです。この時期鴨川両岸の今出川から四条までの間に石垣の堤防が築かれこれが寛文新堤と呼ばれました。堤防が出来たことで、鴨川と高瀬川の流れがはっきり区分されたのでしょう。





高瀬舟には十五石積と十石積の二種があり、前者は六間一尺（12m強）幅六尺八寸（2m）後者は五間五尺（10m強）幅六尺五寸と記録されています。この舟では乗客のほか材木や薪・炭・酒・醤油等他国からの商品や原料が運ばれていました。下りの便は様々な日用品の他、農作物の肥料になる糞尿が重要な運搬物だったのは注目に値します。

* 鉄道が開けてからの京都近郊の交通事情 *

明治5年9月13日日本で最初の鉄道が新橋～横浜間 29 kmで開通します。以後日本各地で鉄道が敷設されますが、明治9年7月には大阪～向日町間 36kmが開通していました。明治10年（1877）2月5日天皇ご臨席のもと、京都神戸間鉄道開通式が新装なった京都停車場で行われています。

京都停車場は七条塩小路南に設置され、「七条ステーション」さらになまって「七条ステーション」とも呼ばれました。京都駅ではなかったのです。この事は「鉄道唱歌」でも証明されます。

鉄道唱歌は明治33年5月に初版が発行されたちまち大流行したのですが、この当時でも七条ステーションだったのです。

鉄道唱歌 No.46

東寺の塔を左にて
止まれば七条ステーション
京都京都と呼びたつる
駅夫のこえも勇ましや

京都大津間の当初のルートは明治41年（1921）東山トンネルと新逢坂山トンネルの開通までは伏見経由で現在の奈良線を通っていたのです。



鉄道唱歌 No.45

大石良雄が山科の
その隠れ家はあともなし
赤き鳥居の神さびて
立つは伏見の稻荷山

東海道線の輸送力増強は日清戦争前後明治27年（1894）前後から緊急課題とされ、複線化や様々な改良の一環として両トンネルが掘られました。

新線開通までは勾配が急なため補助機関車をつけての運行を余儀なくされていたようです。両トンネル開通で高低差が44m低くなり京都大津間は20分余で通過できるようになりました。現在は奈良線に属する稲荷駅に「ランプ小屋」が残っていますが、これは東海道線の最古の構築物として鉄道記念物に指定されています。

また稲荷駅には鉄道唱歌の歌碑が近年（昭和46年）構築されているようです。

すれ違いメロドラマの原点

明治35年（1902）は母校の前身京都高等工芸学校が開校した年ですが、国民新聞に掲載されていた、徳富蘆花の【不如帰】は当時の一世を風靡したメロドラマでした。このすれ違いの場面を山科駅に設定しているのです。（以下【不如帰】原文 部分省略あり）

【駅夫の「山科、山科」と叫び過ぐる声彼方に聞こゆる……浪子は徐ろに移り行く彼方の列車を眺めつ。（中略）窓に頬杖をつきたる洋装の男と顔を見合したり。「まっ、あなた」「おッ浪さん」此は武男なりき。車は過ぎむとす。狂せる如く、浪子は窓の外にのび上りて、手に持てる黄色の手巾（ハンカチ）を投げつけつ。列車は五間過ぎ十間過ぎぬ。落つばかりのび上りて、……】

駅での行き違い列車は単線運転の時期だからこそ、その確立は高いが、実際には当時の時刻表で合うものはありません。蘆花は全くのフィクションでこのすれ違い場面を書いたようです。つまりこの時期は複線化の寸前であり、また旧山科駅が単線であった事を著実に証明しています。

明治後半以降京都の鉄道開設と伏見市誕生

東京～神戸間の東海道本線が全線開通したのは明治22年でした。同29年には京都奈良間41.8kmが全通、明治28年（1895）京都疎水の開通と同じくして我が国最初の電気鉄道が路面電車として開通しています。同43年には京阪電鉄が開通。しかし伏見は未だ京都の交通の要点でした。

明治22年市町村制の発布により、京都市と伏見町が誕生します。だが、近隣であるだけに30年頃より京伏合併問題として提唱されてきました。41年東海道本線から離れた事に端を発し、合併問題が大きく取り上げられましたが実現には至りませんでした。背景は伏見が京都より財政事情が豊かだったことです。昭和4年4月伏見は人口5万7千人を超え市制に移行し【伏見市】になります。同時に醍醐村と深草町も伏見市に合併されました。この頃京都府知事が熱心に両市の合併斡旋に乗り出しますが、京都市側が伏見の態度に立腹、難色を示していました。昭和5年伏見市議会が条件付合併案を可決、翌6年4月1日、我が国最初の市と市の合併として正式に認められ伏見区と生まれ変わりました。

（色染・昭35 松尾秀明）

インクジェットプリンターの染色は 現在どこまで進んできているか

* 東伸工業(株)の現況取材 *

NHK TV 関西の報道番組の1つとして『ルソンの壺』と言う番組が日曜 07:45 から 30 分番組で放映されています。この番組の中で本年 5 月【東伸工業(株)】が放映されました。この会社は我々色染会とは色々な立場から関係の深い企業で、旧社名は確か『一ノ瀬(株)』でした。

一ノ瀬式自動スクリーン捺染機を実現させた先代一ノ瀬氏が創業された会社で、現在も直系の一ノ瀬孝一氏が社長を勤められている世界的にもこの分野でのトップ企業です。

同社はまたインクジェットプリンターの製造販売にも 10 数年の実績を持ち、オートスクリーン捺染機で培ったノウハウをベースにした機器はユーザから高く評価されています。インクジェットはご承知の通り、パソコンのプリンターとして開発された機器であり、その開発の歴史は 30 年程前に遡りますが、ここ 10 年ほどの間にテキスタイル向けのプリンターとして大きな進歩を遂げたようです。

東伸工業は、世界がフィールド。
信頼と最先端の技術で、
業界の皆様へ最高品質の機械と、
アフターサービスを提供しつづけます。

半世紀以上に亘って培った技術士魂と、
常に未来を見つめる発想力が生み出す先進のテクノロジーの融合により、
私たちの機械は、日本国内ではトップシェアを誇り、海外マーケットでも
高い評価を受け、世界 35 か国へ製品を送り出しています。



* 日本と欧州の事情の違い *

染、特に模様染めに関して、日本と他国では大きな違いがあります。それは《意匠権》の問題であり、図案や配色：デザイン登録など重要な項目を何処が抑えているかの問題なのです。

- 1) 欧州（イタリア、フランス）では、染色加工メーカーが《意匠権》を持っています。特に著名ブランド（エルメス、グッチ等）は直接染色工場を支配経営するようです。
- 2) 日本は和服関連（小幅物という）を除き、《意匠権》は取り扱い業者（主に問屋）がこれをもっている事が多いようです。

日本に於ける染の歴史は古く、飛鳥、天平まで遡りますが、その主力は和服です。模様染も当然和服から始まっていますが、手書き友禅染が主流でした。型染は江戸時代に始まり、武家の袴の多様化にその根源があります。何れも染色加工場が全て《意匠権》を持っていました。というより、きもの業界では《意匠権》という考え方が 1960 年代まで存在していないと言ったほうが実情ではなかったでしょうか。昭和 30 年代以降我国の経済発展につれて、和服型染めの著しい普及が始まります。特に成人式に着せる『振袖』が爆発的な人気商品に成長します。

この振袖には型染の場合、型紙の枚数 150 組が普及品、高級品となると 300 組などざらにありました。一つのデザインに多額の型紙投資（100~300 万）を必要としたのです。これが和服のデザイン《意匠権》は染色工場という方式が確立した一つの要件でした。

インクジェットプリンターの導入という事態を想定するとき、器機の価格は4000万以上、設置費用と工場設備等を考えると相当な投資が必要になります。他国特に欧州では問題なく染色工場が拠出しますが、日本ではそうは行きません。この問題が、インクジェットプリンターの普及を日本で遅らせている原因の一つです。日本の染工場は比較的規模、資本力の大きい企業でも普及が遅れているのは、《意匠権》に費用負担を要求できないという日本特有



の取引習慣にあります。和服の場合は最初から図案、デザイン、型紙など製作に必要な経費を染工場が負担するものという考え方が定着していました。京都を中心とする和服染工場にインクジェットプリンターの導入が進んだ背景はこのあたりにあります。現在では、東伸工業のインクジェットプリンターは新潟十日町を初めかなり（10社以上）の染工場に導入されているようです。この他、ユニカミノルタ I J のインクジェットプリンターを導入されている企業も全国的にかなりあり、京都でも数社がきもの染色に活躍しているとのことです。

* 多品種少量生産ではインクジェットプリンターに勝てない *

今後の染色加工（模様染）を考えると、従来のスクリーン捺染では多品種少量生産が費用の点からとてもインクジェットプリンターに勝てません。それは誰もが認めざるを得ない現実なのです。中国、インド、その他開発途上国などでは量産品がまだまだ販売の主流でしょうが、先進国では多品種少量製品に軍配があがりそうです。特におしゃれ製品ではそうです。

東伸工業でサンプルとして見せて頂いたのは『エルメスのスカーフ』でした。1㎡程の極うすい物（素材不明）の小売価格が10万円とか、それが国内で100枚以上売れているとの事でした。しかもエルメスの工場はフランスのリヨンにあり、スカーフに関して95%がインクジェットプリンターで生産されているとの事です。他のブランド品メーカーでも大同小異でしょう。

そのほか多品種少量生産の製品では【大漁旗】【のぼり】【宣伝用旗】等がありますが、どんな素材にも、染料、顔料を問わず印刷出来ることから、著しい変革がなされつつあります。将来的には旗の大半がインクジェットプリンターで作成される可能性が大きいようです。

* インクジェットプリンター MONNA LISA *

日本で使われているパソコンのプリンターでは、最大手の一つセイコーエプソンがかなり前からインクジェットプリンターの開発を手がけているらしいということを耳にしました。その取材をお願いした所、快く応じて頂けました。

現在このインクジェットプリンター《モナリザ》を日本国内で導入しているところは



ごく少数です。しかしこの機器を実際に製作しているのは、イタリアのコモにある《ROBUSTELLI》社です。エプソンが開発しているテキスタイル用のプリンターヘッドを搭載し、同じくこのためだけに開発された純正の捺染用インクを使い、コモ地区では世界で最も優れたデジタル捺染プリンターとして評価されているとの事です。

このMONNA LISAはイタリア伝統の職人技術と日本の最先端プリンターヘッド技術とが融合し、最高峰の性能と品質が実現出来たと自負されています。多品種少量生産に迅速に対応できるため、イタリアコモ地区を中心に近年飛躍的な拡大を見せ、イタリアにおける捺染業界のデジタル化をリードし、生産量トップシェアを誇っています。日本での普及はこれからと、京都テクニカルリサーチパークに本格的ショールームを今年7月に正式オープンされ、我々の取材にも実際に機器を稼働実演して頂きました。

* 松尾捺染(株)のインクジェットプリンター *

松尾捺染(株)のインクジェットプリンターはコニカミノルタ I J でした。同社は非常にユニークな発想でインクジェットプリンターを使用されているようです。かなり以前からこの方式の研究を深められており、最近コニカミノルタ IJ に変更されたようでした。インクジェットプリンターに連続して《蒸し 熱処理》工程があり、この処理に合わせた生産速度になっています。通常はもっと大きな能力の熱処理工程が別があり、印刷されたものを別処理するようですが、同社は小型の熱処理機と連動させています。処理速度はそれほど大きくありませんが、何分これに従事されているのは一名なのです。しかも2台のインクジェットプリンターを同一人が担当されているというから全く驚きです。即ち【多品種少量生産】に合わせる方式を、人員の削減という形で実現されていると言う事になります。



同社はロータリー捺染機やスクリーン捺染機も当然活用されており、これらが主力ですが、テスト生産にはインクジェットプリンターをフル活用されているのでしょう。

新聞報道によると、現在全世界におけるインクジェットプリンターのシェアは1~2%であり、近い将来には15%まで拡大すると予想されています。イタリアやフランスにおけるシェアは推定15~20%で、我が国では3%未満と大きな差があります。これから益々インクジェットプリンターの需要が拡大して行くに違いありません。

* ナテックス(株)の超広幅インクジェットプリンター *

現在稼働中のインクジェットプリンターではこれ以外の実物はなさそうです。我々の情報の範囲内では、現実の幅は1.8mまでが殆ど、それ以上の幅のインクジェットプリンターは、カタログにはあっても実際に稼働しているものはありません。

ところが、3.2m幅の機器が実際に稼動しているのです。ヒューレッドパッカーD LX850 という機器で、この機器は今年9月に初めて稼動したのです。恐らくこれは世界最初、今後も当分現れそうにありません。



この機器を導入されたの

は、ユニークな発想で堅実な経営を実現されている奈良のナテック(株)さんです。この会社は幅広でなければならないカーテン、テーブルクロス類の染色ではトップのシェアを誇る企業です。

衣料用生地染色では2.4m幅が最大、それ以上は実際の生地が量産物として生産されていません。ところがカーテンやテーブルクロス地は違います。3.6m幅も実際にあるとか、衣料用生地の世界とは感覚が異なるのです。このインクジェットプリンターに適合する広幅(3.6m)の生地もナテック(株)の子会社で特別に生産させて、実物を機器に合わせておられるとか。とにかく発想が違うのです。今後も衣料用の染色加工に捉われず、多品種少量生産のもの、例えば《垂れ幕》等に焦点を合わせて、受注拡大を図りたいと考えておられるようです。下の写真はナテック(株)が初めて作成された第1号の作品で、幅2.7m、長さは約7mあります。この式の垂れ幕の注文が早速入ってきているとか、但し、高橋社長(高橋伸和氏色染科53年卒)は採算を今のところ度外視し、安価な価格で生地とも提供したいとのことでした。

この垂れ幕だと、意匠図案などの費用を含めて約5.8万円の革命的な価格で作製出来るそうです。取材にうかがった時には実際このような垂れ幕を作成中でした。空手の大会用の垂れ幕で、大会期間中も含め1ヶ月も下げられれば充分役に立つとの発想のようです。ポスターからの転用により5万円程で納入出来るそうとの事でした。ナテック(株)のインクジェットプリンターは、今後様々な話題を提起しそうな予感がします。



このほかに、セーレン(株)、小松精練(株)、東海染工(株)、和歌山染工(株)等大手の染工場がインクジェットプリントの開発に注力しています。今回はこれらの状況を取材していませんので、レポートはできませんが、著名なヴィスコテックス(セーレン)を含めて各社のHPや業界新聞等に詳細に掲載されていますので、ご参照ください。

(色染 昭34・佐藤忠孝)

(故松尾秀明氏の遺稿を纏めて頂きました)

文様染の系譜 (3)

前回、文様染について我が国はハードテーブルを用いて摺る、インドやヨーロッパではソフトテーブルを用いて捺る、或いは刷る、と述べた。舌足らずの説明であったので少し補足したい。文様染は世界各地で行われていたが、大航海時代インドの文様染がアジア、ヨーロッパ、中東、北アフリカにもたらされ、その技術がこれ等の世界を支配するようになった。文様染は、手作業により一品一品作る方法と、型により量産する方法がある。インド式の国では注蠟機や筆を用い、我が国では紙筒や刷毛、筆を用いて一品生産を行った。量産するには、インド式では木版を用いてブロックプリントを行い、我が国は紙型を用いて合羽摺を行う。



図-1 ブロックプリント



図-2 プリント用ブロック

ブロックプリントの工場では、テーブルの表面をウールや綿のブランケットで覆い、クッションをつけ、その上に目的の布を拡げ、色料を塗付した木版を手で捺すか、ハンマーで叩いて色を布に写す。これがソフトテーブル法である。我が国では、染めたい布を直接板に張り付け、紙型を用いて篋で糊を摺り付ける。着色することもあるが概ね、白色の防染糊を摺る。これをハードテーブル法と呼ぶ。

文様染めの系譜(1)で、遣唐使の廃止により蜜蠟が輸入されなくなり、藤纈染は途絶えたと書いた。しかし日本人はこの防染による文様染の魅力を、決して忘却の彼方には追いやらなかった。蜜蠟の代わりに選んだのは米糊である。注蠟機に代わるものは紙筒である。藍染の場合を除き、地色は布をしんし張りして、刷毛による引き染めを行う。こうしてハードテーブルによる文様染の技術は徐々に改良され、江戸中期に至り友禅染の完成をみる。ここで見落とせないのは、和紙と柿渋の存在である。薄く抄き出された和紙を柿渋で縦・横に貼り合わせ、室の中で渋を^{むろ}枯らし、狂いを抜いてある。文様染用型紙としての強度と寸法安定性は素晴らしく、更に柿渋によって撥水性が付与される。これに文様を彫る。文様によっては、渋紙を複数枚重ねて彫る事によって型紙を量産することも出来る。こうして出来た型紙は、いくら強度が優秀であると言っても、所詮は紙製品である。木版のように乱暴に扱う事は出来ない。刷毛や篋を用いて、労わりながら糊や色料を摺り付ける。これを合羽摺と言う。型紙を使う文様染には、中国の印花布と、沖縄の紅型がある。中国には和紙に匹敵する紙はなく、柿渋も生産されていないので、中国独自の型紙を使う。従って印花布に

は豪快さはあっても、和様の繊細さが無い。紅型は本土の和紙を使い、柿渋に代わって芭蕉の切り株から取った芭蕉渋を使う。染色技術、とりわけ染色手段は伝統的な独自の物であるが、型紙の製作には本土の影響を無視することは出来ない。



図一3 印花布 中国



図一4 印花布 中国



図一5 型染 丹波木綿



図一6 紅型 沖縄



図一7 紅型 沖縄



図一8 紅型 沖縄

型紙の出現により、今まで個別生産であった文様染の衣料が大量に生産されるようになり、特権階級にしか許されなかった文様染の衣料が大衆に解放された。

草創期の文様染とも言える三纈の、防染による文様表現に魅惑された日本人は、入手困難になった蜜蝋の代わりに、米糊を選んだと先に記述した。米糊とはうるち米と^{もちごめ}糯を主原料とする糊料を指す。フリー辞典ウィキペディアによると、うるち米に含まれる澱粉の成分は、アミロペクチンとアミロースが8対2の割合で、糯は殆んどアミロペクチンである。アミロースは水に溶解するが、アミロペクチンは水に溶解せず、昇温により膨潤して餅状の粘りのある糊になる。米糊をベースに、補助薬品を加えた防染糊は、蜜蝋に対して防染力は少し劣るが、融点を持たない防染糊として我が国の気候、風土に適し、藤纈染つまりバチックにない繊細な趣を持つ防染効果を醸し出すことに成功した。われわれの先祖は、国産品の和紙、柿渋、米糊を活用することによって、拘り続けた防染による文様表現に成功したのである。米糊は文様染の世界では、糸目糊、伏せ糊等、主役であることに変わりはないが、友禅染で有名な一陳糊は、小麦粉が主体で、消石灰と糠を加え、少量の群青で目印の色付けする。ミョウバンを使うこともあるという。また玉糊という言葉がある。卵の白味と小麦粉を混ぜて作った糊である。文久年間(1861-1864)八文字屋甚兵衛が考案したものと言われ、糸目糊には卵の白味8に小麦粉2、伏せ糊には卵の白味5に小麦粉5を混合し、いずれも少量の塩を入れるとある。料理のレシピのようで、染色の話とは思えないが、これは真面目な話である。

☆ここで用語の説明を少ししておく。

防染 生地を、括る、絞る、挟む、防染剤を捺染する、などして染色すると、仕掛けをした所は染まらない。地色の中に白い文様を残すことを白防染、地色の中に色のついた模様を残すことを着色防染と言う。また防水剤を部分的に塗付したり、結んだり、括ったりして物理的に防染する方法と、染料の染着能を化学的に阻害する薬品を使用して、化学的に防染する方法とがある。

糸目糊 本友禪（糸目友禪とも言う）の特徴的技術、糸目糊置き、あるいはその糊そのものを指す。口金がついた紙筒に糊を入れ、絞り出すようにして、文様の輪郭に細く糊を置く。染め上がったとき、この糊の線が糸を引いたように白く残るため、「糸目」と呼ばれる。糸目糊は染液が外へ滲みださないように堰止める役目を果たし、これにより多色の染色を可能にしている。輪郭を白糸目で囲まれた染物は、色数が多くても上品で繊細で、和やかである。

伏せ糊 地染めの前段階で、差し色を塗付した部分に防染糊を塗付し、地染の染料を表面から刷毛引きする。地染の染料は、差し色の部分が先に伏せ糊で防染されている為、その部分の色を汚すことなく、美しい染め物が完成する。

紙筒 筒の中に糊を詰め、絞り出しながら布に塗付し、糸目を引く道具。筒は渋を引いた和紙で作られ、円錐形で、先端に細い穴のあいた口金が付いているⁱ。

「〇〇染め」は今後「〇〇染」とする



図-9 友禪染標本帳
(本学蔵) AN-38



図-10 友禪染標本帳
(本学蔵) AN-38



図-11 友禪染標本帳
(本学蔵) AN-38

室町時代には、公家社会が武家社会へと変化し、平安時代に女性の下着であった小袖が晴れ着となり、織から染の世へと移り変わる。桃山時代に男女共に着飾った辻が花染がそれで、三纈の一つ、^{まつえい}纈纈の末裔絞り染と彩絵がコラボレートした染物である。江戸時代には消滅するが、茶屋染、友禪染へとその系譜は引き継がれる。

三纈の最後の一つ夾纈は板締め染として、その技術は継承される。板に左右対称の模様を彫り、布を畳んでその間に挟み、強く締めて染色する。ブロックプリントが凸版染色とするなら、板締め染は、凹部を染液が流れるから、凹版染色であるとする。しかし板締め染がローラー捺染と同類とは、どうしても考え辛い。



図一12 型友禅 平成辻が花



図一13 板締め染機
(本学蔵) AN-



図一14 現代ローケツ染

染色に携わる染料液を増粘するか否かで、この様に違って見える。絞り染にしても、板締め染にしても、被染物を染浴に浸け、温度をあげ、時間をかけて染色することにより、染料は繊維の奥まで浸透し、味わい深い色を呈する。我々の先祖が奈良時代以後、三纈の防染効果に執着し、辿りついた成果が現在の文様染である。

文様染の系譜には、もう一つの大きな流れがある。室町時代から江戸時代(中世から近代)にかけて、ポルトガル人やオランダ人によって我が国にもたらされた更紗に、当時の人は文様の斬新奇抜さに驚き、これを争い求めた。それは被服類や財布、袋物、煙草入れ等あらゆる分野に活用された。しかし紅毛船によって輸入される量は少なく、到底民間の需要を満たすには至らなかった。従っておびただしい数の複製品や模造品が作られた。紗室染師なる職業があつたらしいが、詳しい事は分からない、多分更紗を作っていたのであろう。

更紗は紗羅染、紗羅陀、佐良佐、紗羅紗、皿紗、花布、印花布、暹羅染と色々な字が充てられてきた。これ等異国情緒豊かな文様染の布、これを今後更紗で統一する。桃山時代から江戸時代初期にかけて、外国船によってもたらされる更紗は、色々な国の色々な更紗で、インド更紗、ペルシャ更紗、ヨーロッパ更紗、シャム更紗、ジャワ更紗等産地名を冠して流布された。なお上に羅列した中の、印花布はさらさと読まれたかどうかは知らないが、先にも触れた様に、中国産の型染である。



図一15 書更紗手鑑
(本学蔵) AN-86-1-00-02



図一16 書更紗手鑑
(本学蔵) AN-86-1-03-00



図一17 書更紗手鑑
(本学蔵) AN-86-1-03-06

更紗の素材は通常、平織りの綿布である。そして、これが使用されるようになったのは桃山時代からであり、丈夫で温かく、安いところから、作業着、普段着として次第に普及した。そしてその端緒は、肥前で木綿の畔織が作られ、次いで豊後、肥後に広まったことからとされる。これが長崎木綿である。



図一18 書更紗手鑑
(本学蔵) AN-86-1-04-00



図一19 書更紗手鑑
(本学蔵) AN-86-1-05-00



図一20 書更紗手鑑
(本学蔵) AN-86-1-05-04

徳川時代になると、伊勢、河内、摂津へと拡がりを見せ、三河^{ぜん}辺りまで東漸した。諸国産木綿には次のようなものがある。伊勢松坂木綿(上品)、摂津木綿(次上)、尾州木綿(中品)、河内木綿(次上)、三河木綿(中品)、泉州木綿(中品)、播州木綿(下品)、淡路木綿(下品)等があるⁱ。

河内木綿について少し補足しておきたい。中世の河内平野は一大湿地帯であった。原因は大和川が氾濫を繰り返す、北に流れて、京橋^{せん}辺りで淀川に合流していた為とされる。その解決策として、大和川を石川合流点から真直ぐ西に流し、堺を^{せん}通って大阪湾に流す付け替え工事を行うしかないとされた。紆余曲折があり、実現に手間取ったが、宝永元年(1704)に着工して、僅か8ヶ月で大工事は完成したⁱⁱ。その結果多くの肥沃な新田が開発され、地柄が綿花栽培に適したことから、泉、摂津を合わせて綿の大産地となった。河内木綿の生産数量ははっきり掴めてないが、最盛期の天保初年(1830頃)推算で年約300万反位かとされる。製品は商都大阪から、日本全土に出荷され、繊維製品の大衆化と普及に大いに貢献したⁱⁱⁱ。こうして畿内と繊維産業との間には、切り離すことの出来ない、強固な関係が成立した。

ⁱ 日本絹人絹織物史 昭和34年2月25日 婦人画報社 P-93

ⁱⁱ 河内木綿史 武部善人 (株)吉川弘文館 S56.5.20 P-13

ⁱⁱⁱ 河内木綿史 武部善人 (株)吉川弘文館 S56.5.20 P-68

掲載 図 出典

図一1、図一2、国立民族博物館 吉本忍 現地にて撮影

図一3、図一4 日本染色総華 唐草・印花布 浦野理一 文化出版局 S.48.5.10

図一5、萩原理一蔵

図一6、図一7、図一8、萩原理一沖繩にて撮影

図一9、図一10、図一11、京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵

図一12、平成辻が花 型友禅 伊藤染工

図一13、京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵

図一14、萩原理一蔵

図一15、図一16、図一17、図一18、図一19、図一20、京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵

(色染・昭28 萩原理一)

奈良のこと (古都)

(2) 平城京 (平城宮跡)

30年前私が奈良へ引っ越して来た頃、平城宮跡はただ広々とした草原だった。

平城京

壬申の乱を制した天武天皇は、古代国家の中央集権化の基礎を築いた。日本最初の本格的都市「藤原京」の建設、大宝律令制定に向けての取り組みなど、奈良時代へ大きな影響を与えた。

藤原京は天武天皇の死後、皇后の持統天皇により建設されたが、僅か16年間で奈良の平城京に遷都してしまう。この理由についてはいろいろな研究がなされており、排水の問題なども挙げられるが、最も大きなものは702年の遣唐使がもたらした唐の都・長安の情報であった。

長安の大明宮は建設中の藤原京とは全く異なっており、東洋第2の大国・日本の首都にふさわしい都を、早急に建設する必要があった。平城京の大きさは唐の長安の丁度半分になっており、大極殿のモデルは大明宮の「含元殿」であった。

708年2月15日に元明天皇の詔が発せられ、平城遷都が決まる。

まさに今、平城の地 ^{しきんと}四禽^と図に叶い ^{ちん}三山^{ちん}鎮をなす

^き亀^{ぜい}並び従う ^{とゆう}宜しく都^{とゆう}邑を建つべし

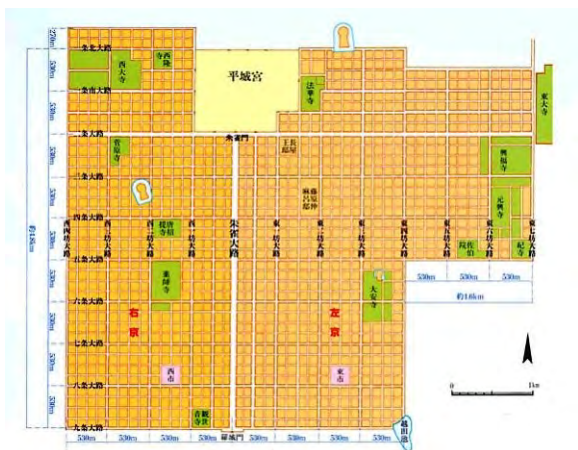
私はこの詔が好きで、お客様を見晴らしの良い高台（門の跡）などに案内し、全員で唱和して、1300年前に想いをはせて貰っていた。

そして、710年（和銅3年）3月10日遷都。794年平安京に遷都するまでの間奈良が日本の首都であり、天平文化が花開くのである。

（784年長岡京に遷都するが、奈良時代は平安京に遷都する794年迄となっている）

平城京は南北 4.8 km、東西 4.3 km（外京は除く）で中央北端に平城宮があった。北に高く、東に高い地形で、興福寺や東大寺は都の東北の高台に聳えていた。

あおによし ならのみやこはさくはなの におうがごとく いまさかりなり



この歌は小野老朝臣が、太宰府に着任しその祝宴で、美しい都を偲んで詠ったものである。

奈良の都は、柱は赤、窓は緑、壁は真っ白に統一された建物が整然と並ぶ美しい街であった。当時の都の人口は10万人（日本の人口600万人）と推定されている。

政の中心は貴族で、約150人の貴族が豊かな生活を送っていたが、民衆は掘っ立て小屋にむしろを敷いて寝起きし、ご飯と汁、塩だけの食事格差の大きな社会であった。

平城京歴代天皇8代、7人の内、主役は聖武天皇である。天武→(草壁皇子)→文武→聖武と続くが、皇子に恵まれず皇女・称徳天皇(孝謙天皇重祚)を最後に、天智系の光仁天皇→桓武天皇と続き平安京へと遷都する。

聖武天皇の御代では、地震、台風、疫病、など悪いことが重なった。天皇は仏の力による天下泰平を願い、大仏建立を決心する。

平城宮跡

平城宮は南北1km、東西1.3kmの大きさ(甲子園球場30個分)で、天皇の住居(内裏)と首都機能を集めた重要施設であった。大極殿(国会議事堂)、朝堂院(官庁街)、東院庭園(迎賓館)、朱雀門(平城宮の正門)等である、朱雀門から都の南端・羅城門までは、幅74mの朱雀大路が約4km続いていた。

平安京に遷都する時、都の建物は瓦、柱、礎石などリサイクルのため全て京都に運ばれ、100年もしない内に都も宮跡も田畑になってしまう。東大寺や興福寺などの社寺は京都に移ることを拒まれたため奈良に残った。元興寺は室町時代の土一揆で殆どの建物を焼失し、再興されないまま民家が建ち商業の街となって行く。そして明治末期になる迄、1100年の間「奈良に都があった事すら」忘れ去られていた。

平安京に運ばれた建物は、その後戦乱などで焼失し何も残っていないが、唯一平城宮・朝集殿の建物は、鑑真に朝廷から与えられ、唐招提寺の講堂として生き残っている。

明治末期(1899年)に、奈良県庁の技師：関野貞が大極殿跡(大黒の芝と呼ばれていた)を発見、棚田嘉十郎や溝辺文四郎などの保存運動などをへて、1922年に史跡に、1952年に特別史跡になる(平城宮跡の3分の1ほど)が、大事件が起こる。

1962年近鉄が、西側の史跡未指定地を買収し車庫建設を計画する。これを契機に全国的な保存運動が始まり、翌1963年に国が全域の史跡指定と国費による買収を決定する。1998年には朱雀門と東院庭園が復元され、更に2008年には国営公園となり、2010年には大極殿が復元される。

遺跡の中を近鉄電車が走っているが、平城宮跡全域確定前の1914年に大阪電気軌道・奈良線(現在の近鉄・奈良線)が開通しており、今では如何ともしがたい。

平城宮跡の地下約85cm付近に1300年前の遺構が眠っている。この辺りは地下水位が高く遺構は水に浸かった状態になっており、木簡などは腐らずに発掘されており、奈良時代の貴重な情報を伝えている。(平城京：12万点、平城宮：5万点)



遷都1300年祭の為に作られた「復元遣唐使船」と平城京歴史館(ジオラマで奈良の都や遣唐使船の航海を再現した)も残っており、是非見て頂きたい。遣唐使船は、幅10m、長さ30mの大きさで、150人ほどを乗せていたそうである。

4艘で船団を組み、630年~894年の間、12又は20回派遣されたが、このうち全ての船が日本に戻ったのはたったの1回のみであり、まさに、命がけの航海であった。

東院庭園は日本庭園のルーツと考えられており、2010年に特別名勝に指定された。それまでの中国や朝鮮の庭園とは異なり、洲浜敷の汀や曲線を用いた池の形などの特徴を持っている。これが発展し平安時代の宇治・平等院の庭園となるのである。



大極殿は、間口44m、高さ24m（大仏殿は49m）の巨大建造物であるが、免震構造の土台の上に基壇を作っており、阪神淡路大震災級の地震にも充分耐えられるようである。遷都1300年祭のシンボルとして、約190億円を投じて復元された。

大極殿は、政の中心で今の国会議事堂に相当するような所である。天皇が建物内部の高御座に座し、高位の貴族は壇上に居並び、その他の大勢の役人などは広場に整列し、詔を聞いていた。

平城宮には12の門があったが、中でも朱雀門は正面玄関で格が高く常時は開かれていなかった。外国使節の訪問や遣唐使送迎の儀式等の時のみ開かれる特別の門で、6月、12月の「つごもり祭」には、大勢の人が集まり「歌垣」で賑わった。

役人は夜明けと共に入場し、日暮れと共に門を出る、夜は広い宮城の中には天皇の家族だけとなる。位の低い役人は京の外れから約4kmを徒歩で通勤するので、夜明けの1時間前には家を出なければならない。（今も昔も首都圏の通勤は大変！）

奈良時代の天皇は全ての権力を一手に握っており、今で言う総理大臣、日銀総裁、最高裁判所長官、大手のメーカーや商社の社長を兼ねているようなものである。

天皇の権威を利用すべく、有力豪族、貴族間の権力を巡る暗闘は苛烈を極め、平安時代になり藤原氏が実権を握るまでは、天皇一家は親子、夫婦、兄弟で殺し合いを続けるが、殺された人の祟りが恐ろしく、御霊神社（八柱神社）を創り神として祀っていた。場所により組み合わせなど多少の違いはあるが、一般には下記の八霊神である。

井上（イガミ）皇后と他戸（オサベ）皇子（光仁天皇の皇后と皇子）

早良親王（崇道天皇：光仁天皇第2子、桓武天皇の弟）

伊豫親王と藤原吉子（桓武天皇の皇子と皇后）

藤原広嗣（藤原不比等の孫：式家）（聖武天皇の時九州で反乱：藤原広嗣の乱）

文室宮田麻呂（文大夫）（843年謀反の罪で流罪：後に無実）

橘逸勢（空海、最澄と同期の遣唐使、842年謀反の罪で流罪：途中で病没）
（嵯峨天皇・空海と共に三蹟に数えられている）

吉備真備（吉備大神）（遣唐使2回、二度目は鑑真を伴って帰国、学者から立身して大臣になったのは、吉備真備と菅原道真だけ）

菅原道真（火雷神）（藤原時平との争いに敗れ太宰府に左遷される）
（天満宮の祭神として祀られている。太宰府、京都北野、など）

（色染・昭35 坂東久平）

「色染物質会」第2回総会議事録

日時：平成23年11月12日（土） 15:00～16:30

会場：京都工芸繊維大学、工織会館、集会室

出席者：会員－36名、委任状－106通

議事内容： 進行：事務局 松岡謙一郎

議事に先立ち、故川畑会長のご冥福を祈り、全員で黙祷した。

1. 議長選出

松岡氏から	現在の会員数	187名	
	総会出席者	36名	
	委任状提出者	106名	の報告があり、

出席、委任状提出者合計は142名（会員の76%）となり、総会は成立した。
続いて、佐藤忠孝氏を議長に推薦し承認された。

2. 会長、副会長の選任

会長に佐藤忠孝氏、副会長に戸塚計浩氏を選任し、承認された。

3. 会長挨拶と新役員の紹介

会誌第1号でご挨拶をしておりますが、今年3月の川端会長の急逝に伴い会長代行を勤めて参りましたが、何とか設立後の最初の1年で計画の大半を消化出来ました。

第2期についてはHPの更なる充実、会誌に発行などと、メールを通じての会員とのコミュニケーションを計って行きたい。会員数も次第に増加し187名となりましたが、名簿の整備を進め増加を目指したい。

続いて、新任の幹事3名（高木恒男氏、犬伏康郎氏、梶原俊明氏）が紹介された。

4. 会則改定案（別紙）改定会則

事務局より、プロジェクターを使い、会則の一部変更案について説明した。

主な変更箇所 名誉職（名誉会長、名誉顧問の新設）

Q：物質工学科の会員勧誘について、どうなっているのか？

A：未だ実績なし、旧色染会から名簿等のデータを引き継いでいないため、未着手である。

Q：物質工学科の同窓会組織があれば、タイアップしたらどうか。

A：同窓会組織の有無は承知していない。

（参考）機織科「マコーン会」は機織科卒業生のみ、窯業科「鴻窯会」は学内教授の応援もあり、新卒者も入会している。

A：色染物質会発足時に勧誘したが、2名しか加入していない。まずは色染科卒業生を固めたい。

事務局 松岡から名簿整備、会員勧誘策について説明があった。

具体策推進に向けて小委員会を来年初に開催し、各年度の世話役を決める方法についてはノーアイデアであるが、小委員会の中で具体化する。

今後、新会員の勧誘に力を入れていくことを確認した。

会長より、新設名誉会長へ古川敏一氏の就任の報告があり、会則改定案を含め承認された。

5. 第一期決算報告（別紙）資料参照

事務局より、プロジェクターを使い、決算報告を行った。

Q：立派な会誌を発行されたことに驚き又感銘を受けている。この費用は？

A：印刷代等役所のものの利用等により、原価安であがっている。

後は役員の手間に頼っているのが現状。(郵送料も含めて約4万円程度)
監査報告を加藤監査役から行い、決算報告は承認された。

1. 第二期予算案提案 (別紙) 資料参照

事務局より、プロジェクターを使い、予算案を提案した。

Q: 会誌の発行時期は?

A: 今期と同様10月を予定している、予算の目処が付けば2回(4月、10月)の発行も検討する。寄稿はどしどし提出頂きたい。

予算案は承認された。

2. ホームページの現況と展望

担当者は坂東(管理責任者)、渡辺(ホームページ作成技術担当)で、維持管理をしている。記事の校正は戸塚、編集に松尾が加わっている。

HPの作成、維持管理を外注すると年間数十万円の費用が掛かるので、会員がボランティアでやっている。素人なので綺麗なものは出来ないが、「質実剛健のHP」で、必要な機能を満たせるよう努力しているのでご理解頂きたい。

HPを通じて、会員への情報提供、会員との交流を計りたいと考えている。

クラス会日より、会員からの寄稿に数多くの原稿が集まるよう、ご協力をお願いします。

Q: パスワードは?

A: 小文字で「matu」

3. 第二期事業計画抱負 佐藤会長

これまでの報告の補足として、会員集めについて各クラスの幹事、世話役を探しコンタクトする。又個人のレポートや、趣味の会なども利用できたらと考えている。

マコーン会の様にニックネームをつけた方が良いのではないかと考えるので、近々ご提案を募るので協力を頂きたい。

また、卒業生名簿の整理と新会員の勧誘に力を入れる計画である。

A: 会員の卒業年度別分布図について説明。(別紙) 資料参照

4. 出席者との応答

Q: 学長、名誉会長の懇親会へのご出席は?

A: 学長は急な東京出張で欠席されるが、古川名誉会長は出席される。

Q: 会員の拡張について、既存の会を取り込んだらどうか。(例 鼎会)

Q: 利用できることはしたらいいが、内容を熟考すべきと思う。

また、各年度の幹事、代表者リストがあった筈なので利用したらと思う。

A: それぞれのご意見、検討させていただく。

萩原氏: 大学の工芸資料館に貴重な歴史的な資料が多く展示されている。その中で現在『染を語る』というテーマで資料を展示しているので来館鑑賞頂きたい。又このホームページもあるので是非閲覧して欲しい。

西川氏: 今年の会誌発行は非常によかった。これからの色染物質会は技術等の発表も重要である。巾を広げて、後輩が続く同窓会に育てて行かなければならない。

8. 閉会の辞 戸塚副会長

皆さんの言われているように、会員を増やしていかなければならない。いろいろな機会での皆さんのご協力をお願いします。

他に、ホームページへの投稿、数は多いが投稿者の数が少ない。多くの方からの枠に囚われない自由な投稿をお願いします。

以上

「色染物質会」第2回総会・懇親会

日時：平成23年11月12日（土） 17:00～19:00

会場：京都工芸繊維大学、学生食堂 出席者：34名

萩原顧問の開会挨拶と乾杯で始まり、途中古川名誉会長から力強い激励のご挨拶を頂いた。先輩、後輩間の交流も活発で、和気藹々の内に2時間が過ぎ、戸塚副会長の閉会の辞で懇親会は終了した。 以上

色染物質会会則

- (名称) 第1条 本会は色染物質会と称する。
- (目的) 第2条 本会は会員相互の親睦と知識の向上をはかることを目的とする。
- (事業) 第3条 本会は次の事業を行う。
(1) 総会、親睦会の開催
(2) 名簿の維持、管理
(3) ホームページの作成及び維持管理と会誌の発行
(4) その他目的達成に必要な事項
- (会員) 第4条 会員は次の各号の有資格者からの申し出のある者で構成し、入会退会を拘束されない。
(1) 京都高等工芸学校色染科卒業生。
(2) 京都工業専門学校色染科卒業生。
(3) 京都工芸繊維大学色染工芸学科卒業生及び大学院修士課程修了者。
(4) 京都工芸繊維大学物質工学科卒業生及び大学院修士課程修了者。
(5) 上記いずれかの学科に在職した旧職員及び現職員。
(6) その他の者で、役員会で承認された者。
- (役員) 第5条 本会に次の役員をおく。その任期は2年とし再任を妨げない。
会長 1名 副会長 1名 幹事 若干名 顧問 若干名
監査 1名 事務局 若干名

第6条 役員の選出は次の各号による。

- (1) 会長及び副会長は会員の中から役員会の推薦により選出し、総会の承認を受ける。
- (2) 幹事は、会員の中から会長が選出し、役員会に諮って委嘱する。
- (3) 顧問は会長の推薦により選出し、総会に諮って委嘱する。
- (4) 監査は、会長が会員の中から選出し総会に諮って委嘱する。
- (5) 事務局は、会長が会員の中から選出する。

第7条 役員の任務は次の各号による。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長が任務を遂行できない期間が生じた場合は、会長職を勤める
- (3) 幹事はそれぞれ会務を分掌し会議を主導する。
- (4) 顧問は重要な会務に参画する。
- (5) 監査は会計を監査する。
- (6) 事務局は会計、庶務、及び広報を担当する。

(名誉職) 第8条 本会に名誉会長、名誉顧問 を設定し置くことができる。
その名称に相応しい人を役員会が推薦推挙し、本人の了承をえて総会に諮って就任を委嘱する。任期を特に定めない。

(会議) 第9条 本会の会議は役員会および総会とし、次により開催する。

- (1) 役員会は全役員から構成され本会運営上の必要事項を審議する
- (2) 総会は毎年（原則として11月第2土曜日）開催し、次の事項の承認を受ける。
会務に関する事項 役員選出に関する事項 会則改正に関する事項
その他
- (3) 総会の決議は出席者(委任状を含む)の過半数を持って決する

(経費) 第10条 本会の経費は、年会費、寄付金、及びその他の収入をもって充てる。
会計年度は10月1日から翌年9月30日までとする。
なお、年会費は別途定めるところによる。

(補足) 第11条 (1) 事務局と会員間の相互連絡はメールを原則とする。
(2) 本会事務局を京都市内又は近郊の役員宅に置く。

(付則)

- (1) この会則は平成23年11月12日から改正施行する。

山紫水明会(昭和34年卒業)同窓会

4月5日、6日に昭和34年卒業の同窓会が、京都熊野神社近くの聖護院御殿荘で開かれました。

会場の聖護院御殿荘は、天明八年と安政元年の京都大火で御所が炎上した際に、仮御所として使われていた聖護院門跡の一部を使用した由緒ある旅館という事でした。しかもこの日は、春の暖かい日差しを受けて門前のしだれ桜が満開で、その上庭には、現皇太子が浩宮時代の学習院高校研修旅行時に植樹された紅梅の他、木蓮、桜も満開で、3種の花が競演して我々を出迎えてくれました。

出席者は同窓生32名中物故者、体調不良の方を除く16名でした。今回は数え年或いは満年齢での喜寿と全国版という事で、関西地区在住者のみならず愛媛、千葉、埼玉、広島、岡山など遠くからも集まりました。久しぶりの対面で学生時代に戻り、宴会が終わっても一晩中夜の更けるのも忘れて飲んで喋っての楽しいひとときを過しました。遠くから出席したメンバーの中には、会の前後に近辺の桜の名所を散策したりして、久しぶりの京都を満喫した人も多くいました。

次回は2～3年後の傘寿での再会を約し、それまで皆元気でいようと声を掛け合って解散しました。



後列：広瀬、桜井、甫天、萩原、牧、松本、
中列：松井、後藤、森村、
前列：藤井、横山、吉岡、石川、近藤、
(野口、大多和 早退)

(色染 昭34・横山清一郎)

さんごかい 35会 (昭和35年卒) クラス会

平成23年11月30日(水)秋晴れの下で、吉田山～真如堂～黒谷まで紅葉狩りを楽しみました。このコースを散策していると、昔の人がひと仕事した後「ああ真如堂、めし黒谷」(ああしんど、飯食いたい)と言っていたのが思い出されました。

1時間半ほど散策後、京都岡崎の第一工業・玄武寮で夕食会を行いました。クラス会の中心で色染物質会の事務局として活躍されていた松尾秀明君が、11月14日に急逝されたため、「松尾君を偲ぶ会」とし、11名が参加しました。夕食会では、まず「献杯」から始まり、和やかな中で楽しいひと時を過ごしました。



2011.11.30 色染35会(真如堂)

(参加者) 左から敬称略

後列：鈴江、安部田、園田、松本(繁)、黒田

前列：坂東、松岡、法貴(旧姓石川)、江藤、林

(中村は宴会のみ参加)

次回(来年4月)に京都府立植物園付近での花見と昼食会を約して散会。

(色染・昭35年 安部田貞治)

色染 38 年卒（みつば会）東京地区の駄弁り会

10月4日に東京地区の仲間が集まった。当初春頃と思っていたが東日本大震災で集まるようなムードでない。もう少し落ち着いたらと思っていたら、今年の夏の酷暑が9月まで続き、結局10月になってしまった。

場所は新宿の三井クラブで、何時も酒井氏に場所を依頼している。集まったメンバーは三河氏、渡辺氏、中里氏、酒井氏、石野氏、早貸の6名で、東京地区にはもう一人鎌田氏が居るが、都合で参加できなくなった。

当日は秋晴れの空で澄み渡り、新宿三井ビル54階の席からの眺めは最高で、都内の眺望、埼玉、秩父の山々が見渡せた。

久しぶりの集まりで、夫々の近況、政治・経済問題、社会問題など、思い思いの感想、意見を論じ合った。その中のテーマとしては次のようなものがあった。

- ・ やはり原発事故問題、原因究明、責任の所在等、新聞・テレビ・雑誌などで論じられていることに対する感想・評論が百出。
- ・ 現在タイで活躍中の伊東氏の近況メール紹介。タイ政情の安定性、洪水の前触れ（現在毎日報じられている洪水は、既に9月末頃から予測されていた）など。
- ・ 現在政権党である民主党と野田政権の頼りなさ、野党の自民党の不満足さ。
- ・ 1月に帰国した小生早貸のエジプト政変の状況と中東・北アフリカの不安定問題紹介。
- ・ 卒業50周年になる記念行事。（関西地区幹事への一任、幹事さん宜しく。）
- ・ また一般的な思い出話、家族問題、趣味、家庭菜園、競馬・株、スポーツ、自己研鑽など。

侃侃諤諤の意見がとびだし、2時間半があつという間に過ぎた感じであった。

当日参加メンバーの集合写真（左から酒井、石野、中里、早貸、三河、渡辺）

（色染 昭38・早貸正幸）



クラス会だより・色染昭53 (忘年会とゴルフ会)

平成23年 忘年クラス会

恒例の年末忘年会を平成23年12月30日、大阪天満宮近くのラウンジ・キーストンを借り切って、午後4時より開催しました。

出席者は8名で、毎回、新幹線に乗って浜松から来てとんぼ返りする紅一点の西村（旧姓 梶原）女史も出席してくれました。なんと彼女は、かかりつけの歯医者さんから、正月前に抜歯をするように勧められていたが、抜歯をすると、この会の「てっちり」が食べられなくなるので、抜歯を断り、痛み止めを飲みながらの涙ぐましい参加でありました。

話題に上ったのは、われわれ前期高齢者？たちがよくする、健康診断結果の話、持病の話、飲んでる薬の話で、大いにもりあがり、お互い年をとったことを確かめ合いました。また23年は震災の影響が大きく、景気が良かった話はゼロで、それぞれ、きびしかった一年を振り返りました。

出席者の一人が持参した山形の秘酒といわれている焼酎を、皆でストレートにて飲みましたが、これがまた大変美味しく、言われなければブランディと間違えるほどまろやかな味でした。持参した本人の森川氏は、この焼酎を飲みすぎて、ダウン。残念ながら途中退場となりました。最後は、いつもどおり「てっちり」の雑炊で締めくくりました。このラウンジのマスターは、いつもは、横にすわってわれわれの話をだまって聞いているだけで、お酒や生ビールのおかわりのサービスをしてくれるのですが、来年からは自分も参加費を払うので、ぜひ会話に参加させてくれとの申し出がありました。和気あいあいの雰囲気、ご想像下さい。

(今回の出席者は、伊山、角、高橋、長井、西村、藤村、前田、森川 でした。)

残念ながら当日の写真はありません。

平成24年 第1回 ゴルフ会

平成24年3月31日、富田林市にある聖丘カントリークラブにて、同窓ゴルフ会を開催しました。毎年、12月の忘年会に参加している中の何人かが中心となって呼びかけ、2組8人が参加しました。今回の幹事でもあり、このクラブのメンバー会員でもある藤村氏が、ずいぶん前に桜満開を予想してのエントリーでしたが、残念ながら桜はまだつぼみで、それどころか当日はすごい雨風で、傘を広げることもままならぬほどの大荒れの天気でした。幹事の配慮で、一時間ほどスタート時間をずらしてのプレイでしたが、最初の3ホールほどは最悪でした。筆者の25年間のゴルフ人生でもワースト3には入る悪コンディションでした。アドレスを慎重にとることができず、びしょびしょになるわ、寒いわで、前半はゴルフになりませんでした。後半はいくぶん天気が持ち直しましたが、知らない人同士のプレイなら、たぶん苦痛から絶対棄権していたかと思われる程でした。さすがにそこは同窓会ということで、プレイ中も冗談の言い合いで、だれ一人棄権者なしで無事終了しました。はじめからルール設定もなく、ゴルフを楽しくすることが目的の会でしたので、

スコアをつけていない者も続出するほどの少々真剣さに欠けるゴルフとなりましたが、楽しくプレイができました。参加者の長井氏は、この悪天候の中、一度もカートに乗らず、全ホールを完歩されました。その意味で、MVP賞をあげてもよいかと思われます。

ともかく30年以上ぶりで会った同窓生もあり、トータルとして有意義な一日でありました。次回はかならず、晴れた日にプレイすることを誓って解散しました。



ゴルフ会 写真

後列左より

長井 伊山 前田 藤村

前列左より

田中 銅子 平林 高橋

(色染 昭53・高橋伸和)

色染物質会・会報への投稿お願い

色染物質会事務局

本会の維持発展と会員相互の親睦増進を目的として、下記の通り会報の発行を予定しています。

記

1. 会報は、A4版（A3二つ折り）で年1回の発行とします。
2. 会報は、会員と役員会で決められた配布先にのみ送付します。
一般の方は、ホームページから閲覧出来ます。
3. 会報の記事内容はおよそ次の通りです。
 - 1) 本会の活動に関するもの（例：総会報告、催事レポート）
 - 2) 同期会（クラス会）、地域会、その他の活動に関するもの
 - 3) 本学に関連するニュース
 - 4) 会員からの投稿

会員からの投稿は会報の主要部分を占めるものです、
詳細はHPの投稿規定を参照下さい。

惜別 松尾君を偲ぶ

2012年5月9日 松尾君の未亡人の案内で、アメリカから一時帰国した級友石部さんと共に清水寺の南通りの五条坂を登り、大谷廟の左側に有る松尾君の眠る墓前に線香を手向けつつ、色染物質会の設立に命を懸けてくれたことに感謝し冥福を祈った。

昨年(2011年)の11月12日 色染物質会の第2回総会が開かれる日 私は開催時間に少し遅れるとの連絡を松尾君の携帯に何度も入れたが発信音が鳴るだけで通じなかった。いつも確実に通じるのでおかしいなあと思いながら同窓会館へと急いだ。総会は進行中だったが、彼の姿が見えない。直ぐに坂東さんから、役員は午前中に集合し、総会の準備打ち合わせをして、昼食後の休憩中に 彼は急に気分が悪くなり、様子がおかしいので救急車を呼び、横山幹事が同乗して日赤病院に搬送されたと告げられた。車に乗る時は意識もしっかりしていたが、途中で心肺停止状態になり集中治療室で意識も戻らず 14日に帰らぬ人となった。まさに朝に紅顔 夕べに白骨の思いである。

彼は面倒見の強い、世話好きの人であった。わざわざ容量の大きいパソコンを購入し、色染物質会の設立の為に同窓会名簿から色染科、物質科の卒業生 1200人余りの住所、氏名、卒業年度、電話などを拾い出して、基本名簿を作成。設立発起人の依頼、会合、役員候補、年度幹事、入会案内、第1回総会開催と殆ど一人で切り盛りしてくれた。彼なくし今日の色染物質会の存在はあり得ない。

面倒見の良さはクラスの開催の世話や、同級生の病人見舞い、物故者全ての墓前に詣でていることにも表れている。

また、凝り性でもあり、話好きで 長電話で故事来歴から説き起こして説明してくれた。時にはその故事のあるところまで行って調べてくる程であった。昨年ホームページに掲載された亀岡と京都の山深い水尾の清和天皇の御陵を訪ねて執筆したのも松尾家のルーツを探る一端であったと思われる。

更に新しいもの好きでもあった。まだパソコンや計算機もない 45年ほど前に商品管理や顧客名簿にパンチカードの導入、次いでコピー機や印刷機をいち早く導入。商品見本や図案をコンピュータに取り込み商品が地方商店になくとも顧客に見せられるようにするなど、一歩先駆けて凝りだしていた。図案にも凝り、台湾の故宮博物館所蔵品を見学して気に入った図案の写真撮影の許可を求めてわざわざ訪台したほどである。その図案が友禅柄のヒントになると教えてくれたものである。友禅は高級品になると、柿渋紙を彫った 200枚以上の紋紙(柄紙)で刷られて染められているようで、その柄も貴重なもので主なものをインプットしていた。呉服の絹製品がウィンドーに陳列すると日光で褪色するのを改良するため、反応染料で染める小型染色機に開発試作に昭和 50年頃に協力したことが思い出される。

旅行好きも彼の特長。世界各国を奥さんとともに旅したが、なぜかアメリカ、中国には行かず、大国は面白くないと語っていた。現役引退後は名湯百選を巡り、その数 130 を超していた。山形に出張の際に洋梨を食し、果物の中でこれほど旨いものはないとわざわざ取り寄せて送ってくれたこともある。昨年珍しく高校時代の同級生に呼びかけて下呂温泉一泊の同窓会を企画したそうで予感があったのかとの奥さんの言葉。その奥さんとは高校時代からの付き合い、連れ合いで、丁度その秋に金婚式にあたり二人で記念旅行をと計画していた。それを待たずに、我々をも残して一人旅に旅たってしまった。

(合掌)

(色染・昭35年 園田英雄)

物質工学の現況

大学院 工芸科学研究科 物質工学専攻 川瀬徳三教授

私が現在の研究室（界面材料学）に赴任して約10年となりますが、その間に物質工学を取り巻く環境は大きく変化しました。中でも、2006年（平成18年）4月の本学改組に伴い、本学は工芸学部、繊維学部の2学部制から工芸科学部に1本化され、同時に2004年の国立大学法人化後も残っていた物質工学科という名称は物質工学課程に変更になり、生体分子工学課程、高分子機能工学課程（共に旧繊維学部高分子学科より）との3課程で応用化学系として連携する形に変わりました。学生募集も応用化学系として行うことになり、3課程で165名の学生定員ですが、物質工学課程の定員は65名となり、学科の時と比べ約20名の定員減となっています。物質工学課程への分属は、2年次に入った時点で学生の志望を重視して行われます。同時に、物質工学科としての旧夜間主コースは廃止されました（現在、夜間主コースは定員40名の先端科学技術課程として存続している）。昔はほとんど女子学生はおられなかったと思いますが、例年、物質工学課程の2～3割は女子学生で、3課程の中でも飛びぬけて比率の高いのも特色かも知れません。

物質工学課程では、物理化学、有機化学、無機化学、分析化学などの基礎科学研究分野に、有機材料学、高分子材料学、無機材料学、セラミックス材料学などの応用・実用研究分野を加えた、幅広い学問体系に支えられた教育研究を行っています。また、応用化学系の他の2課程との違いとして、演習・実験に多くの時間が割り当てられているという特色があります。教員数は大学設置基準に合わせる、他課程・新専攻への移籍などにより減少し、現在、教授14名、准教授10名、助教7名のスタッフで課程・専攻が運営されています。課程の教育は19の研究分野（専門講座・協力講座を含む）が担っています。各研究分野では、原子・分子やその集合体である物質の反応性、構造、性質およびそれらを調べるための方法論、新しい高度な機能性を有する有機材料・高分子材料やセラミックス・ガラス材料あるいはそれらの複合材料の合成方法、構造、物性、材料評価等の最先端の研究などのほか、地球環境、地球資源、エネルギー問題等についても研究しています。旧物質工学科における分子認識学講座・有機材料開発学講座・無機材料開発学講座の3大講座制は現在も教育システムの運営上残っていますが、最近その再編が検討されつつあります。

物質工学の分野は、教育・研究内容が幅広く、内容も深化、専門化が進んでいますので、例年、学部卒業生の約7割が大学院博士前期課程（修士課程）に進学しています。大学院は工芸科学研究科物質工学専攻として、現在、定員48名に微増しています。物質工学専攻では、創造力豊かな高度専門技術者・研究者の育成を目標に掲げ、有機材料化学系、無機材料化学系、物理化学系の広領域にわたる研究分野が相互連携して先進的な教育・研究を実施しています。

このような教育・研究を通して、純正・応用化学を基盤に、環境に配慮した、人と社会に役立つ物質を創出することを我々の課程・専攻の目標としています。

最近では急激な経済と社会の変化のため、就職難が話題となっています。物質工学でもこの状況に直面していますが、幸いにも就職率は高く、特に大学院博士前期課程修了者は化学系企業を中心にほぼ100%の実績が続いています。

以上のように、物質工学は時代とともに、変化・発展をしています。

（本稿は編集部の依頼で執筆して頂きました）

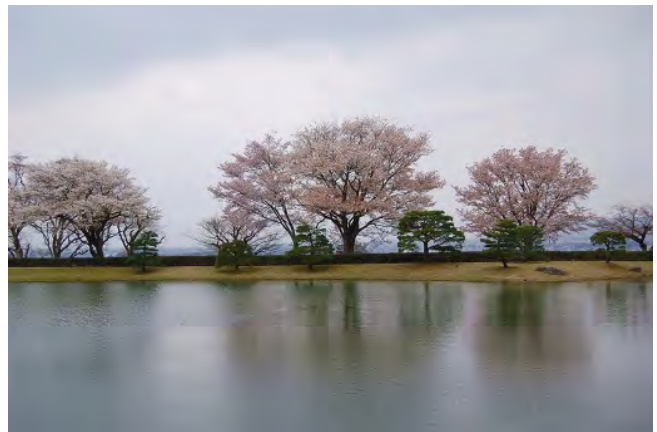
古都近辺の名桜

「願はくは 花のしたにて 春死なん そのきさらぎの 望月の頃」桜花をこよなく愛し、花の歌を数多く残した西行法師の作である。西行はこの歌のとおり旧暦の二月十六日（新暦では三月十九日、1190年）、河内の弘川寺にて七十三才の生涯を終えたといわれている。西行にあやかり花の下にて死ねたらと願うほどに、また三月の声を聞き東風（こち）が吹き始めると、今年の花見はどことそぞろ心浮き立つほどに桜にはまり込みっぱなしの来し方を過ごしてきた私である。そこで私の桜歴を振り返り、古都とその近辺の名桜「一本桜」を中心にご紹介させていただくことにした。

まずは京都、洛中洛外の FAVORITE SPOTS から。

① 修学院離宮

宮内庁管轄の本離宮は、参観希望時期の3ヶ月前、4月であれば1月1日からの受付になる。往復はがきに指定の書式で書き入れ京都御苑の宮内庁事務所へ申し込む。江戸初期、風流人で名高い後水尾上皇（ごみずのおじょうこう）が別荘として造営されたもので、下の茶屋、中の茶屋、上の茶屋と比叡山西南山麓を上へ上へと登りながら回遊する広大な庭園である。上の茶屋は浴龍池という大きな池を回遊する地形になっており、この池の西南側に山桜が3、4本ありこれが見事である。幹も太く、枝ぶりも横に十分広がっている。名苑であり拝観者は限られているので、絶好の環境で花見ができるわけで、このような贅沢は他ではなかなか経験できるものではない。私は何度この地を訪れたことか。



浴龍池と山桜

② 上賀茂神社

本殿の前庭である馬場の東側にしだれ桜の古木がある。枯木と書いた方が相応しいほどに太い幹に、どちらかといえば寂しげに幾本かの枝が広がり白い花をつけている様がかえって風情を感じさせてくれる。京都での最後の帝、明治帝の父君、孝明天皇が御所から下賜したもので、御所桜と呼ばれている。そしてその隣に爛漫と咲き乱れている紅しだれがあり、斎王桜と名つけられているが、この対象がお互

いを引き立てあっている。ここは花見客も少なく、神苑西向かいの名物、神馬堂の焼餅をかじりながら、花とだんごで、ひねもすのんびりした時間を過ごすことができる。



御所桜



斎王桜

③ 京都御苑（御所）

地下鉄今出川駅の最寄り、御苑の北西部に児童公園があり、この近辺は何種類かの桜が植わっている。御苑には専属の庭師が何人かおられ丹精こめて世話をしておられるので、いずれも最高の状態で開花している。公家筆頭の近衛公の庭跡、近衛池の畔にしだれ桜が4、5本ある。竹垣に囲まれ樹下はタンポポの花が咲き乱れ絵をみるように美しい眺めである。また2本ずつ花時がずれているので4月中楽しめるのも庭師の配慮であろう。このしだれ桜のひとつは「近衛の糸さくら」と呼ばれ由緒の深いものである。前出の明治帝の父君、孝明天皇の御製「昔より名にはきけども今日みればむべ目かれせぬ糸桜かな」（目かれ＝目離れ、目を離す）がある。数年前NHKの生放送でライトアップされたことがあり、偶然情報を入手し夜桜を見ることができた。夢のような春宵の一刻であったが、常時は夜桜を観られない。



糸桜



夜桜

③ 常照皇寺（じょうしょうこうじ）

京都の北方、花背から西へ7、8キロの山あいにあるこの寺は観光案内にも出ており、花見客も訪れるが、それでもかなりの道のりを車で走ることや、この寺以外に近辺は特に何もないので、洛内の花どころに較べれば随分静かに花見を楽しむことができる。九重桜というしだれ桜が数本、いずれも古木で庭を埋めて咲き乱れており、歴史を感じさせる奥ゆかしさがある。南北朝時代—北朝の初代、光厳上皇（こうごんじょうこう、1362年）の建立—のこの寺院建造物自体が美しく時間の経つのも忘れて長居をしてしまう。御車（みくるま）返しの桜という若木が本堂前に一本あるが、これは前出の風流人で名高い後水尾上皇が九重桜を観に行かれた時、帰り道で振り返ったところ、この花が目に入り大変美しかったので車を返したとの言い伝えによるもの。ただし今の木は2代目か、3代目か、若木である。一重と八重の花が同じ木に咲いている。花時が九重桜より遅いので同時に見るには時期を合わせるのが難しい。



九重桜



御車返しの桜（左は先代の枯木、右は若木）

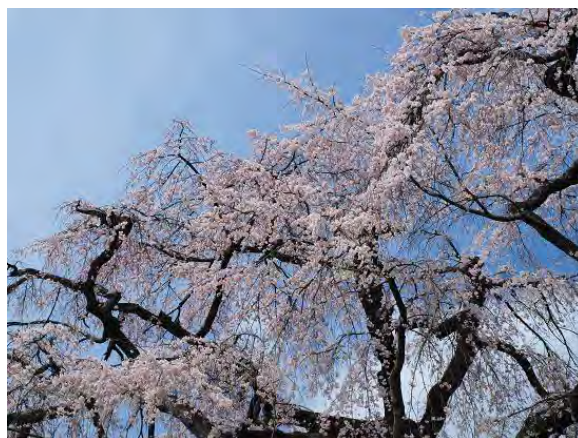
京都には至るところに名桜があるが、いずれも人出が多く落ち着いて時を過ごすとなると、上のスポットは他所の花が人並みを引き付けてくれるお陰で静かなのが何よりである。

次は古都、奈良方面の銘木。

⑤ 井手の地藏禅院

京都から車で奈良街道（国道24号）を南行し、木津川を右に見ての快適な道を抜けたあたりに井手町という村落がある（JR玉水が最寄り駅）。ここは明日香から奈良へ遷都した当時の左大臣、橘諸兄（たちばなのもろえ）の旧跡、郷里でもある。この村に流れる玉川堤の両岸の桜並木は桜祭りで賑っているが、あえて雑踏は避けて、この村の東山麓にある地藏禅院まで山道を登ると、境内に見事なしだれ桜が数本あり、京都、円山公園の名物桜はこの桜を移したものである。丸山の桜ほどには手入れは行き届いていないが、同じしだれが数本乱れ咲いている景色を想像されたい。眼下には菜の花畑が広がり、

木津川堤が見渡せ、絶好の立地でもある。このシーズンには地元の人が桜餅や花見団子を売りに来ており、花と団子を楽しむことができる。下界の玉川の花見ついでにやって来る陽気な人たちを避けて、week day に出かけたいところである。



地藏禅院、しだれ桜

⑥ 大宇陀本郷の又兵衛桜

名阪国道、針インターチェンジで降りて12～13キロ南行すると大宇陀の村落に着く。村はずれの阿紀神社の近くにこのしだれ桜はある。大阪冬の陣、夏の陣で真田幸村と共に豊臣方に参戦した後藤又兵衛の郷里と言われ、立派な石垣の上に大木が立っており、又兵衛桜と呼ばれている。回りは桃の果樹園となっており桃花を背景に石垣の上に咲き誇る豪華さは絵になる景色である。地区の方々が村起こしに熱心で、夜桜も楽しめるよう整備されている。数年前の大河ドラマ、たしか直江兼続の話であったかに紹介されたようで、直後は結構な見物客が訪れたようである。遠出の価値がある見事なものである。



又兵衛桜 大宇陀本郷
(石井桂輔氏撮影)



千年桜 仏隆寺
(石井桂輔氏撮影)

⑦ 仏隆寺 千年桜

長谷寺、大野寺、室生寺と桜名所をまわり、室生寺から山道を西へ4キロ程走った辺りに仏隆寺がある。上記の大宇陀からは東へ4、5キロのところでもある。仏隆寺は小高い丘の上に建っており、石段を登っていく途中の斜面にこの名物桜はある。この桜は山桜、里桜、霞桜といった通常の種類には当てはめ難く、これ一本だけではあるが仏隆寺桜と分類されているとのことである。相当の古木で、太くて垂直にそそり立った幹から直線状の枝が横方向に広がりシャープな姿で、花は小ぶりで白色である。上記の数々の花とは一線を画した **EXCLUSIVE CHERRY TREE** である。石段の左右には彼岸花の青々とした葉が密生しており、秋もまた曼珠沙華の赤と桜紅葉の美しい眺めが思いやられる。

私のようないわば「花狂い」を批判した古歌がある。

「花をのみ待つらんひとに山里の雪間の草の春を見せばや」藤原家隆 — 新古今集

なるほど耳の痛い文句ではある。千利休はこの歌にわびさびの真髓をみていたく愛で、大阪城の茶室は「山里丸」と名付けたほどである。しかし私にとってはまだまだ東方に北方に憧れの桜たち — 根尾村の薄墨桜、三春町の瀧桜、盛岡の石割り桜、角館の武家屋敷桜、等々 — が待っていてくれる。この心境になる日がやがて来るのか、はなはだ心許ない次第である。

(昭35・色染 松岡謙一郎)

編集後記

10月2日、第2号会誌作製のため、奈良に佐藤会長、横山、坂東、松岡、山崎、園田幹事が集合し、印刷、製本、封筒詰、発送作業などを行いました。編集はメールのやり取りと広報担当の坂東さんの周到な準備があり無事発行の運びとなりました。

ホームページに掲載された原稿や 応募いただいた母校の景観写真、絵画作品など掲載したかったのですが、残念ながら紙面に制約あり、次回号に掲載させていただきます。

物質工学の現況について原稿をお願いしました川瀬教授には心よく執筆を引き受けていただき有難うございました。

事務局 堺市南区桃山台3-30-18 園田 英雄 TEL 072-299-2728

発行人 色染物質会 会長 佐藤 忠孝

メールアドレス sikisen@matugasaki.com

HP URL <http://www.matugasaki.com/>